山形大学男女共同参画推進室　第9号 2012

文部科学省科学技術人材育成費補助金
女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）

Office for Gender Equality, Yamagata University

NEWS Letter

男女共同参画シンポジウム 11月11日
「女性研究者の活躍と裾野拡大～大学連携を通して～」を開催

「第3次男女共同参画基本計画」（平成22年12月）や「第4期科学技術基本計画」（平成23年8月）が閣議決定され、「科学技術・学術分野における男女共同参画」も次の段階へと進もうとしています。

本シンポジウムでは、県内の大学運営関係者、高等学校関係者、行政や地域の方々など約100名の参加で、教育・研究分野における男女共同参画に向けた連携・協働による各機関の発展と若い世代の育成について、熱の入った話し合いが行われました。

◎基調講演「科学技術・学術分野における男女共同参画の推進～第3次男女共同参画基本計画の策定を踏まえて～」

笹井弘之氏（文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課長）

笹井弘之氏から「女性にとっても男性にとっても生きやすい社会が男女共同参画社会。それぞれの高等教育機関が置かれている状況は様々で、男女共同参画の取組も色々な方法がある。他機関の情報を得て、やれるところから取り組んでいただきたい。経費の面など難しい点もあるが、今回のように「大学コンソーシアムやまがた」というような組織を活用するなどそれぞれの機関で叡知を生かして取組を進めていただきたい」というお話がありました。

◎第1部パネルディスカッション「女性研究者の活躍に向けた大学連携」

県内5高等教育機関の運営関係者から、各機関の現状や今後の方向についての発表の後、ディスカッションが行われました。

会場からも「山形大学の取組をコンソーシアムの各加盟校と連携して行きたいという話があったが、まず優先的にやるべきことは何か」という質問があり、「他大学の情報がなかなか入らない。当大学は女性教員割合は高いが、意識が進んでいるかというとそうでもない。大学コンソーシアム等でイベントを開催し、各大学から参加できるようにしたい」「高校生をエンパワーメントするロールモデルを各大学から出していただき高校生に話をする機会を作っていってはどうか」等の意見が出されました。

最後に、今後一層、男女共同参画を推進していくために、交流と連携を深めていくことを誓って、伊藤眞知子氏から「男女共同参画に向けた大学連携・山形宣言」が提案され、満場一致で採択されました。

左から　コーディネーター　伊藤眞知子氏（東北公益文科大学教授）
コメンテーター　笹井　弘之氏（文部科学省男女共同参画学習課長）
パネリスト　遠藤　恵子氏（山形県立米沢女子短期大学長）
大河内邦子氏（鶴岡工業高等専門学校教授・図書館長）
工藤　教和氏（東北公益文科大学副学長）
菅原　京子氏（山形県立保健医療大学看護学科長）
北野　通世氏（山形大学男女共同参画推進室長）

男女共同参画に向けた大学連携・山形宣言

本日のシンポジウム参加者は、交流と連携を深め、男女共同参画を推進していくことをここに宣言します。

1　男女共に学びやすく働きやすい環境づくりをめざして、一層取り組んでいきます。
2　男女共同参画の推進のため、連携とネットワークづくりを進めていきます。

2011年11月11日　　男女共同参画シンポジウム参加者一同

◎第2部パネルトーク
「女子高校生☆夢に向かって！～女性研究者が疑問にお答えします～」

高校生とゲストとのトーク

石島智子氏（東京大学特任助教）から「私の仕事・研究・家庭」を、はやのん氏（理系漫画家）から「漫画で理系女性を応援する」を、渡辺絵理子氏（山形大学准教授）から「ラ・フランス、サクランボから化粧品を開発」をテーマに講演が行われた後、山形県立山形東高等学校・山形西高等学校生4人とトークが行われました。高校生から、「どういう果物の性質が化粧品に向くのですか」「自分がしたい研究と共同研究の内容が違うときはどうするのですか」「農学部を目指していますが理数教科が苦手です。大学の授業についていけますか」等の質問が出されました。「理系・文系や得意・不得意にこだわらず、大学に入ったらそこがスタートライン。好きになれば勉強しますよ」というエールが送られました。

山形大学の女性研究者の抱える「不安」とは？

～「巡回聞き取り相談調査」の結果～

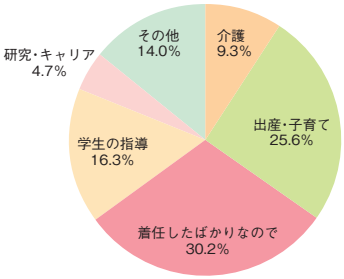
幅崎麻紀子コーディネーターの報告

男女共同参画推進室では、平成21年度より、毎年、「巡回聞き取り相談調査」事業を実施中です。この事業では、男女共同参画推進室のスタッフが女性教員と博士課程の女子大学院生のもとを巡回し、仕事や生活上の「悩み事」について聞き取り調査を行っています。第1回目（平成21年度）は平成21年11月～平成22年2月、第2回目（平成22年度）は大震災の影響により年度をまたぎ平成23 年1月～5月にかけて、「巡回聞き取り相談調査」が行われました。それぞれ、96名（平成21年）、51名（平成22年）の女性研究者よりご協力を得ました。ありがとうございました。

「相談調査」は1時間以上も調査にご協力いただくことも多く、聞き取りの内容は多岐に渡っています。ここでは、調査結果の中から、①女性研究者が「大変だ」「不安だ」と感じている問題群、②教育や研究の魅力、③大学に望む支援制度の3点についてお伝えします。現在、第3回目の「巡回聞き取り相談調査」を実施中です。ご協力のほど、よろしくお願いいたします！

★研究と生活を両立する上で、現在（過去を含む）「大変だ」と感じている事柄

着任時　女性研究者が負担に感じる最も大きな事柄は「着任時」と関係しています。「システムのわからないところを聞きにいくことができなかった。精神的にもかなり追い詰められました。（30代 2年目）」「年度の半ばで赴任すると、一番つらいのじゃないかな。言葉の訛りもあるので、何を言っているのか、どんなニュアンスで言っているのかがわからない。（30代 1年目）」など、赴任直後の慣れない環境に相談相手もおらず負担感を感じているようです。

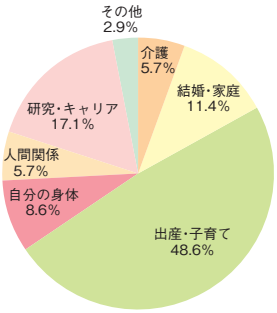


出産・子育て　については、「子供が小さかった頃は、論文は書けない、考えられない…下の子が小学校に上がるまでは。焦りました。（40代）」、「保育のサポートがないから大変だった。学会へは行けない。子供が病気になることもあるから。（40代）」など、多くの女性研究者が、子育て時の研究が進まない状況に焦りを募らせています。

★研究と生活を両立する上で、将来「不安だ」と感じている事柄

出産・子育て　将来の「不安」については、最も多かったのが「出産・子育て」についてです。「子供をそろそろ作りたいと思っていますが、子育てしながら研究というのは、大変なのかな。（30代）」「学部で産休や育休を取った女性教員がいない。サポートがあるのかもしれないが、不安になることばかり。（30代）」「育児休業も一年は欲しいと思っていますが、数週間で復帰されたという前例ができるとやりにくいですね。前例がその先生だけなので…。（30代）」

子育て中のロールモデルがいなかったり、あっても「大変そう」な先輩研究者の姿を見て、育児と仕事の両立に大きな不安を抱いているようです。



研究・キャリア　については、「自己評価や第三者点検が始まり…評価の時に、論文を書いていないのは恥ずかしい。プレッシャーはあります。同じ分野の人が、どんどん研究費をとっているので。（40代）」「あと20数年、ずっとやっていける自信はない。頑張りきれるだろうか。研究費がとれなかったら、もうだめだと思ってしまう。（40代）」と、研究業績を積むことに焦りを感じている姿が見られます。

その他　「結婚出産も考えないと…（研究室に）子育てをしている人がいるとわかるのでしょうけれど、まだ一人もいないので。（40代）」「数年前から更年期症状で眠れない…元気がでなくなるんですよ。昔はあれだけバリバリできたのに。気力の衰えを感じます。（50代）」など、結婚や出産についての悩みや、自分の身体の不安、介護の不安など、多くの女性研究者が、将来のワークライフバランスに不安を抱いているようです。

★「教育や研究は楽しい？」

不安感を抱える一方で、教育や研究に魅力を感じている女性研究者の声も多く見られました。

「実験している時が一番楽しい。学生と一緒に実験して結果が出ると嬉しい。（40代）」、「自分も成長できる。常に新しいことを勉強していく楽しみがある。大変なこともあるが、新しいことをできるので楽しい。（40代）」「ようやく自分の力だけで…ちょっと道が開けてきた。楽しくなってきた。（30代）」など、仕事にやりがいや楽しさを感じている女性たちの姿が明らかになりました。

★女性研究者が望む支援とは？

女性研究者の皆様から要望の高かった「支援策」については、「研究を支援する人」「大学内の託児施設」「病児保育施設」「学童保育」「相談システム」「子育て・妊娠時に役立つような情報」「何かあった時に頼める人材バンクシステム」などを求める声があげられました。

男女共同参画推進室では、調査結果をもとに、今後も、女性研究者の抱える問題を軽減するための施策を行っていくと共に、女性も男性も共に働きやすい環境となるよう、環境の整備を進めていきます。ご協力ありがとうございました。

女性研究者裾野拡大セミナーの開催

◎農学部

講演会「女性研究者として歩んできた道」

久保田紀久枝氏（お茶の水女子大学教授・前副学長）

10月4日（火）
（学部生・院生他35人参加）

久保田紀久枝氏による講演

お茶の水女子大学の前副学長で嗅覚と味覚の相互作用を研究されている久保田紀久枝氏をお招きし、西澤 隆学部長の挨拶の後、講演が行われました。

「お茶の水女子大学の学生の頃、同級生たちと『女性が働き続けるためには』というテーマで勉強会をやりいろいろな人にインタビューなどをした。そこで結婚や出産後も自分が納得すれば続けていけるような職業、一人で責任をもってやれる研究者などの仕事がいいのではないかと考えるようになった。そんな頃、お茶の香りの研究をしている食品化学の先生に出会い、かっこいいな、面白いなと感じた。お茶の水女子大学が初めて博士課程を開設するということから、受験を決めた。博士号第一号になり、その後、日本学術振興会の研究員を経てお茶の水大の教員になり今に至っている」ということでした。

講演会を企画した阿部利徳副学部長と森 静香准教授の進行で質疑応答が行われました。学生から「女性研究者としてつらかったことは」という質問に、「あまりないが、子どもが病気の時に預ける所がなく困った」ということでした。「同級生や若い先生と一緒に勉強会をした修士の頃がとても楽しく、学生にも大学院進学を勧めている」とのことです。

実験セミナー「作物からDNA・RNAを抽出してみよう」

10月22日（土）
（女子高校生14人参加）

実験中の高校生

女子高校生14人が、阿部利徳教授と笹沼恒男准教授の指導でイネの葉からの核酸抽出実験とアガロース電気泳動による核酸確認実験を体験しました。小西省吾研究員をはじめ6人の学生がアシスタントとなり、事前準備には1日以上の時間がかかったということです。そのお陰で高校の授業では経験できない実験の面白さを味わう機会となりました。また、学部4年生の和田慶子さんから卒業論文のテーマや大学での学生生活についての講話もあり、大学生活をより身近に感じることができました。

参加した高校生から「DNAなどは教科書の図でながめるだけなのでとても新鮮だった」「大学へ行きたいという気持ちが強くなった」という感想が寄せられました。

◎医学部

医学科セミナー「医学部卒業で研究するってどういうことだろう？」

10月5日（水）
（14人参加）

医学部を卒業すると臨床医になることをイメージしている学生がほとんどです。そこで、研究職に携わるキャリアを紹介することで新たなイメージを描くことを願って伊関千書・高橋賛美医師によってセミナーが企画されました。医師8人（教員3人、医員2人、研修医3人）、医学科学生6人が参加し、女性医師にとっての男女共同参画の重要性や大学で研究することの魅力が語られました。また、女性であるがゆえに、出産を期に生活が変化してしまい、男性と同じキャリアを積めないという歯がゆさなど家庭と研究の両立の難しさも出されました。

先輩医師から「24時間自分の時間として使えるのは今だけ。いつ結婚するか子供を産むかは出たとこ勝負。まずは時間を有意義に使って、自分で計画できる部分、例えば認定医を取るなどを早くやることが重要」と参加者にアドバイスが送られました。

看護学科セミナー「次世代を担う女性研究者の裾野を拡大するには」

11月12日（土）
（約30人参加）

下田智子氏による講演

石幡明教授の企画でセミナーが開催され、学生から研究者まで幅広い層が集まりました。講師は山形大学医学部看護学科の卒業生2人で、北海道大学大学院保健科学研究院で助教を勤める下田智子氏と山形大学医学部看護学科・助教の松田友美氏。「研究の発信できる看護師になりたい」「世の中のもっと良い看護を提供したい。そのためには、看護の背景にある生命科学の基礎知識が必要」と、研究者の道に進まれた経緯について話されました。そして、基礎研究の重要性を熱く語りながら、「将来、一緒に研究しましょう」と後輩たちに声をかけていました。講演終了後は、片野由美名誉教授、渡辺皓名誉教授を交えて、活発なフリーディスカッションが行われました。

◎人文学部

セミナー「みんなで話そう　キャリアアップ＆就活」

11月9日（水）
（女子学部生約100人参加）

山形大学人文学部社会文化システム研究科OGの菅原清華さん（独立行政法人日本学生支援機構）と菊地亮子さん（山形大学工学部事務部）、現役大学院生の亀山美里さん、法経政策学科4年生佐藤友佳さんが登壇し、キャリアアップと就活について体験談が語られました。大学院進学理由と過ごし方、メリットなども紹介され、参加した学部生との質疑応答が行われました。学生にとって大学院進学や就活を実感する機会となりました。

女性研究者からの **The Message**【第9回】◎山形大学の女性研究者を順次紹介しているコーナーです

上木 厚子 先生

山形大学農学部食料生命環境学科教授

◎「男女共同参画」変わったこと、変わらなかったこと

私は30年以上も前に理系大学院（博士課程）に在籍したが、その頃既に大学院修了者の就職難は普通で、周囲にはアルバイトをしながら研究を続ける多くの“オーバードクター”がいた。私自身も東京にあった農水省の研究所で研究を続けながら、一体いつになったら安定した状態になるのかと、研究への興味とは別に、重い気持ちをいつも抱えながら生活していたことを思い出す。

現在の私は、1学部1学科となった農学部の食品・応用生命科学コースでバイオマス資源学分野を担当し、主に再生可能エネルギーの生産に関わる微生物に関する教育と研究を行っている。この研究室は、遡れば1966年に最初の卒業生を送り出した農芸化学科応用微生物学研究室が発端となっている。学科改組などの紆余曲折はあったものの、同窓会がずっと維持されてきており、先日2年ぶりに多くの同窓生が集まってくれた。この同窓会の席上である女性に、「卒業する時先生に、最低5年は勤めろと言われました」とか、別の、同級生だった男性と結婚した女性には、「結婚の報告に行った時に、こうして女の側が仕事を辞めてしまうのよね、と言われました」などと言われた。家事も育児も夫婦（家庭）の責任なのに、何故当然のごとく女の方が退職しなければならないのか、という残念な気持ちが思わず出てしまっていたようである。

女性研究者が少ないのは、その予備軍となる女子学生が少ないためである、という議論がある。確かに私が学生だった頃、理系分野の女子学生は極端に少なく、東大の農芸化学科に女子学生が初めて入ったことが話題になったことを覚えている。山形大学の農芸化学科の定員は45人程度だっと思うが、初期における女子学生の少なさは研究室の同窓会名簿を見るとよく分かる。その後私が赴任した頃には女子学生は徐々に増えて4分の1から3分の1程度となっており、この状態が暫く続いたように思う。農学部全体では現在、年度によって差があるものの、概ね男女半々といった状態であるが、このうち私の担当するコースの今年度の2年生は女16人で男9人と、男女比が完全に逆転した。工学部や数物系の女子学生の割合はまだまだ低いと思われるが、しかし、このように、少なくとも農学または生物化学系における女子学生の割合はどこの大学でもかなり高くなっている。私が学生だった頃と比較すると隔世の感があり、状況は確実に変わってきたのである。彼女たちが大学を卒業するまでの長い間に自己努力と周囲の援助で培った能力を、“家庭”に留まらせることなく、社会的にいかに最大限発揮させるのか、内外問わず難問山積の上に少子化の今後の日本にとって、必須の課題だと思う。一方、大学を含め官公庁あるいは多くの民間企業の中枢においては、一部を除いて完全な男性主導が相変わらず続いていて、日本における真の「男女共同参画」の道の険しさを改めて感ずる。肝心の席には男がいるのが当たり前（標準的）で、そこに女がいると無意識になにがしかの違和感または戸惑いを、未だに、特に多くの男性は持っているのではないか。しかし、現在40代半ばくらいの世代までは男性の有能な新人が問題なく供給されてきた分野でも、教育されて社会に出て行く人材としては、今や女性が男性を凌駕している分野が確実に増えている。いずれの組織においても、女性に責任をもった仕事をどんどんさせて育て、大胆に抜擢し、男性と同様の決定権をもった立場で活躍させ、それによって、仕事の現場に男女のいずれがいても誰も違和感を感じない、そういった成熟した社会的意識が早く一般化して欲しいものである。

私はこれまでに多くの修士学生の他、博士課程の学生を主指導、あるいはこれとほぼ同数の学生を同じ研究室での副指導という立場で指導してきた。彼らは、社会人入学だった一人を除いて、全員が男性だった。学位取得者の中には幸い大学教員に採用された者もいるが、他大学の大学院を修了した者も含めれば、ここ7年程の間に学位を取得した研究室の卒業生のほとんどが任期付きポストで働いている。現在若い研究者の多くは、不安定な雇用形態で働かされる上に早急な成果を求められ、精神的にも肉体的にも酷使されており、彼らが安定した気持ちで研究に集中できる状況とはほど遠い。学生を教育して社会に送り出す側としては勿論、男女の区別なく同様の力を注いできた積もりである。そういった立場からすると、現状のままで女性研究者を優遇するといっても、いろいろな意味で限界があるように思う。国の健全な将来のために必須の「科学技術」あるいは「学術」の振興を図るためには、一部の人間あるいは限られた分野を特別扱いするのではなく、まずは、学位をとったばかりで勢いのある若い研究者全てを、少なくとも生活に不安を抱かなくてもよい状態で、男女の区別なくのびのびと活躍させるための状況の改善こそが急務ではないだろうか。

研究と子育て両立の道を切り開いてこられた上木厚子先生

お子様が小学生の頃、学内の教員と一緒に署名を集め、鶴岡市に申請して市では2番目の学童保育を実現されました。鶴岡での子育てを振り返り「保育園や病院が近く5～10分程度で行けるのが地方都市のいいところ」と強調されています。この度3月をもってご退職されます。深い感謝と共に一層のご支援をお願いいたします。

Information 1

1月28日(土) 13:30~17:00

女性研究者裾野拡大セミナー

「目指せ★未来のMs.CEO!! ～理系女子力を世界で活かそう!! ～」を開催します。

- 会場：山形大学工学部百周年記念館セミナールーム
- 内容：講演「平和構築で活きる理系力」
  NPO法人日本紛争予防センター事務局長　瀬谷ルミ子氏
  パネルトーク「世界に貢献する理系女性研究者リーダー像を考える」
  大野恵美氏・瀬谷ルミ子氏・山口スティーブ氏

Information 2

3月5日(月) 13:10~14:40

「山形ワークライフバランス・イノベーション」アドバイザリーボードを開催します。

- 会場：事務局棟第1会議室

文部科学省 科学技術人材育成費補助金 女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）の終盤を迎え、これまでの取組の評価と補助金終了後の活動継続についてアドバイスをいただきます。結果は後日、報告致します。

編集後記／新春のお慶びを申し上げます。本年も男女共同参画、女性研究者支援、ワークライフバランスの実現を進めて参ります。また、東北の被災地が順調に復興すると共に、多くの方々の心の傷が一日も早く癒えることを祈っております。2012年1月

山形大学男女共同参画推進室
〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12　TEL 023-628-4937、4938、4939
E-mail danjo@jm.kj.yamagata-u.ac.jp
http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/danjo/

リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。